

令和元年6月7日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02949

研究課題名（和文）中世後期イングランドの聖体拝領にかんする説教史料の研究

研究課題名（英文）A Study on Sermon Materials on the Eucharist in Later Medieval England

研究代表者

赤江 雄一（AKAE, Yuichi）

慶應義塾大学・文学部（日吉）・准教授

研究者番号：50548253

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中世後期イングランドにおいて特別な重要性をもった聖体拝領の教説を扱う説教史料の理解に寄与した。説教を用いてどのように伝播したか、その様相の把握を史料の同定から読解までを通じて行うとともに、中世後期のイングランドにおける説教というメディア自体の変貌の把握に寄与し、メディア・コミュニケーション史と宗教史との統合的探究の可能性を拡大した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、中世ヨーロッパ社会において社会全体を纏める制度として機能していたカトリック教会が、比較的新規に誕生した教説を、活版印刷発明以前の状況のなかで普及させるために当時の大量言説普及システムである説教をどのように用いたのかを、イングランドに即して検討したものである。活版印刷以降の出版世界がインターネットによって大きく変貌しつつある現代に（意外にも）通じる、あるいは示唆するところがある。

研究成果の概要（英文）：This study has contributed to a deeper understanding of sermon materials on the teaching of the Eucharist in late medieval England: differences in types of audiences and messages, and over the period, shedding light on how it spread by the means of preaching. In doing so, it also has provided insight into the development of sermons and preaching during the period, exploring the frontier of integrated research of 'media' history and religious history.

研究分野：西洋中世史

キーワード：西洋中世史 説教 聖体 メディア 異端

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代以降急速に進展した研究によって、西ヨーロッパでは13世紀以降、説教が「活版印刷術以前のマス・メディア」といえるほどの規模で行われたことが明らかになり、広範な社会的および歴史的な文脈のなかで考察される対象となってきた。13世紀初頭に教皇権が托鉢修道会の設立を支援したのは、異端運動をも生み出した12世紀の激しい教会改革運動を統制下におき、民衆を正統信仰に留まらせるために民衆への説教を主要な使命とするスペシャリストの集団を必要としたからである。托鉢修道会はその修道士たちを優秀な説教者へと教育・訓練し、その過程で膨大な量と多様な種類の説教著述支援著作を生み出した。応募者は、マス・メディアとしての範例説教集の性質を執筆から口頭での民衆への伝達と受容までの過程を高い精度で描く英語での単著を公刊した。この成果を踏まえ、これまでになされてきた説教における教説内容のみを分析しがちな先行研究に対して、教説のみならず、その伝播のあり方をこれまで以上に精度高く捉える研究へ向かうことが可能と考えられた。

## 2. 研究の目的

本研究が分析対象とした教説は、聖体拝領（あるいは聖餐）に関するものである。キリストの「最後の晩餐」を記念し、聖職者によって聖別されて文字通りキリストの体と「なった」ところのパン（ホステア）を食する秘蹟である聖体拝領は、キリスト教初期から現代にいたるまでキリスト教信仰にとって重要な位置をしめてきた。11世紀以降、聖体はどのように「キリストの体」であるかをめぐって深刻な議論が起こり、さらに13世紀から14世紀にかけてはアリストテレス哲学の受容と絡んで高度な神学的哲学的議論が展開した。特に重要なのは、1264年に初めてリエージュで導入された「聖体の祝日」が、14世紀初頭にカトリック教会全体で祝われるべき祝日とされ、さらに同世紀の終わりから15世紀には野外や都市において大規模な劇や祭りが伴う民衆信仰・文化の焦点となった事実である。本研究が注目するイングランドでは、聖体の祝日の祭礼が大規模化しつつあったまさに同時期の14世紀末にオックスフォード大学の神学者ウィクリフ（と彼の教説を奉じるロロード派）が聖体の実体変化を否定し、まさにそれ故にイングランド初の大規模な異端と断じられることになる。すなわち、本研究が主な対象とした14世紀から15世紀にかけてのイングランドは、聖体拝領にかんする学問的な議論が活発に行われると同時に、民衆の聖体拝領への信仰と教義への関心が高まりが見られる注目すべき歴史的舞台である。上記を踏まえ、研究の目的は以下の通りである。

- (1) 「聖体の祝日」がイングランドに導入された14世紀初頭以降15世紀にかけての「聖体の祝日」のための説教史料を同定する。
- (2) いつ誰がどこで、どのような立場で、聖体拝領に関するどのような教説を、どのような聴衆を念頭において、どのようなテクニックを用いて、どのような言語で、その説教を著述しているかを分析する。
- (3) 同説教における聖体拝領をめぐる時代的变化を明らかにする。
- (4) 同一のテーマを扱う説教を多数扱うことによって、中世後期のイングランドにおける説教というメディア自体の変貌を明らかにする。

## 3. 研究の方法

- (1) 聖体拝領についての説教史料の同定・収集
- (2) それらの写本の翻刻 / 文字起こし、
- (3) 関連資料の収集と読み込み、
- (4) 写本およびテキストの分析

以上の作業と順に、しかし(1)の作業の完全な終了を待つことなく、可能になった段階から(2)以降の作業を並行させつつ取り組む。

## 4. 研究成果

14-15世紀イングランドにおける聖体拝領に関する説教に関する本研究の研究実績は以下のようである。

- (1) 第一に「聖体の祝日」がイングランドに導入された14世紀初頭以降15世紀にかけての「聖体の祝日」のための説教史料の同定については、説教写本目録の利用およびイングランドの説教写本を所蔵する主要大学図書館および主教座教会付属図書館の目録の精査を通じて40件弱を同定した。
- (2) (1)の作業のなかで、逆に、これまで聖体の祝日の説教として論じられてきた14世紀イングランド農民反乱におけるジョン・ボールの説教は聖体祝日の説教としては考えることはできず、別の文脈のなかで理解しなければならないことを明らかにした。
- (3) 誰が、どこで、どのような立場で、聖体拝領に関するどのような教説を、どのような聴衆を念頭において、どのようなテクニックを用いて、どのような言語で、その説教を著述しているかを分析する点について、確定できない部分が残されるものの、とりわけ学識ある聖職者を聴衆に想定する説教と俗人を最終的聴衆として想定するものあいだに、ロラード派の説教が位置する知見をえた。
- (4) (3)に関連して、14世紀前半に当時教皇庁がおかれていたアヴィニヨンにおいて、説教の形式について、学識説教者たちは聴衆として非常に明敏な違いを認識しており、それが当時の正統異端論争に深く関連していたことを明らかにした。教説の内容だけに注目するのではなく、それがどのような形式でおこなわれたのかと関連させて理解することの重要性を示した。
- (5) 同説教における聖体拝領をめぐる時代的变化については、正統派の教義の広範な伝播、学問的かつ民衆的異端の出現、さらにそれに対する正統派のカウンターという過程が見られ、特にロラード派出現以降の正統派説教の教義的な議論がそれ以前にくらべて明確にあらわれることを観察した。
- (6) 中世後期のイングランドにおける説教というメディア自体の変貌に関して、ラテン語・英語混淆体の説教を記録する写本が多数出現する15世紀の状況を明らかにした。ラテン語・英語混淆体の説教が、そのままの混淆体のかたちで聴衆に語られてきたとする近年有力な言語学者による議論に対して、そういう場合がありえたことは排除しないものの、説教形式と特定の説教テクニックに注目することによって、混淆体のまま語られたとは確実に言えず、むしろ混淆体は俗語（英語）で語られていた事例があることを示した。

上記の成果については多数の口頭報告を国内外で行ったが、それらをそれぞれのかたちで公刊する準備を進めている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

赤江雄一「托鉢修道会—中世後期の信仰世界」『西洋中世研究』9、2017、1-7頁 査読無

〔学会発表〕(計7件)

赤江雄一「羅俗混淆説教は何語で語られたか」イギリス史研究会 2018年10月 お茶の水女子大学

Yuichi Akae, 'Concordantia vocalis': A Thorny Issue between Composition of Sermons in Latin and their Delivery in the Vernacular, Understanding Multilingual Sermons of the Middle Ages Forms, Methodologies, and Challenges, 2018年5月 Institut für Mittelalterforschung Österreichische Akademie der Wissenschaften (Wien)

Yuichi Akae, John XXII and Different Views of Sermons in the Beatific Vision Controversy, International Symposium: Medieval Papacy: Governance, Communication, Cultural Exchange, 2017年2月、立教大学

Yuichi Akae, A Window into the World of 14th-Century Learned Preachers: *De componendi sermones* of Thomas Waleys OP, Conference: Dominicans in the Medieval Society of Northern Europe –Friars and Sisters of the Dominican Order and Their Interaction with the Rest of Society in the Northern Provinces), 2016年11月 The University of Southern Denmark (Odense)

Yuichi Akae, The Lenten Sermons in the *de tempore* Collection of John Waldeby OESA: Sermon Form and Message, International Medieval Congress, 2016 年 7 月 University of Leeds

赤江雄一「問題ある説教者ジョン・ボールの肖像」西洋中世学会第 8 回大会 2016 年 6 月 11 日 東北大学

赤江雄一「イングランド農民反乱におけるジョン・ボールの「説教」再考」早稲田大学高等研究所セミナーシリーズ(研究エリア・新しい世界史像の可能性) 2015 年 11 月 早稲田大学

## 6 . 研究組織

特記事項なし。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。